

# 文語の苑

メールマガジン第十六号（平成二十四年十月）

ヴィパッサナー修行その2

それでは実際の行法に移ることにしよう。

修行は自らの観察に始まる。自分自身の行為・状態を法として絶え間なく観察し続けるのである。観察というのは五感で捉えるということである。それをセンサーションと呼んでいる。或る一つの動作を観察するときそれは複数のセンサーションから組み立てられていることが分かる。例えばコーヒークップを持ち上げるという動作は、(1)（手を）上げる、(2)（手を）伸ばす、(3)（手でカップに）触れる、(4)（取っ手を）握る、(5)（手を）上げるといつぶつに分解できる。（括弧内は参考までに書いたものであってその判断はセンサーションそのものではなく非法である。法はそれを除いた部分である。）行者は間違いなく法として観察していることを確認するためにラベリングという手段を用いる。前の例で言えば動作をしながら「上げる」、「伸ばす」、「触れる」、「握る」、「上げる」と言葉で確認して行くのである。これをパリー語で「サティ」、「念」と訳される。）を入れるという。動作を構成するセンサーションの一つ一つに対応する言葉を貼り付けて行くからラベリングと呼ぶのである。

行住坐臥一挙手一投足に全てラベリングを施してゆくととなると只事ではない。普通で動作を行えばとてもラベリングできないから動作のほうをラベリングに合わせて遅くせざるを得ない。従って動作は著しく緩慢になる。修行は朝起きる時から夜寝る時まで休みなしである。修行の合宿は朝起床の鈴の音を聞くことから始まる。「聞いた、聞いた」のサティを入れ、起きる動作も適宜分解してサティを入れる。布団を畳むのも掃除をするのも全てサティを伴うからスローそのものである。

生活における動作・状態にサティを絶やさぬようにすることは大事だが、修行中の大部分の時間は坐禅、立禅、歩行禅に費やされる。人間は生きている限り呼吸は必須である。全ての雑事から離れてひたすら坐り続ける坐禅においても呼吸は常にあり、これに伴うセンサーションこそ基調となるラベリング対象である。しかしラベリングは「吸う」、「吐く」とはならない。現実のセンサーションは呼吸に伴って起こる腹部の「膨らむ」、「凹む」の身体感覚である。「吸う」、「吐く」は二次情報であり、こうラベリングをすると身体に命令する号令になってしまう。ラベリングは感じたことを実況放送のように捉えるのであるから「膨らむ」、「凹む」でなければならぬ。このラベリングを使って坐っていると呼吸は決して規則的でないことが分かる。早くなったり遅くなったり、或いは「膨らむ」ばかり3回も続いたり、或いは全く呼吸が止まってしまふこともすらある。それに合わせてラベリングを施すのである。「止まっている」というラベリングも当然必要である。

このようなラベリングで何時間も坐っていられば達人である。実際にはいろいろ雑念が起ってしまう。外部からの刺激に気を取られることがある。雑念が生じた場合は「雑念」あるいは「妄想」とラベルを貼ればよい。長時間坐って足が痛くなつて来たら「痛み、痛み」である。鳥や雀が鳴いたときは「鳥」、「雀」とやっではいけない。判断という情報処理が入るからである。「音」とか「聞いた」と貼るべきである。外部からの刺激に適切なラベルを貼りそこなうと気がついてみると連想という形で雑念が湧いてくる。

歩行禅のラベリングの一般的なものは次の通りである。先ず立っている状態から片足の踵が上がる。そこで「上がる」。次いで爪先が離れる。「離れる」。次に上げた足を前方に運ぶ。「運ぶ」。次に（足が地面に）「触れた」。最後に「踏み込んだ」とラベリングしながら体重を移動する。少し熟達してくると「触れた」の次に足裏に圧力を感じて「圧」とサティを入れる余裕が出て来るかもしれない。

# 文語の苑

メールマガジン第十六号

当初はなかなかタイミングがうまく行かずやはずれてラベリングを施すものである。また上達すると上に述べたよりももっと精密で細かなラベリングができるようになる。コーヒークップの例で言えば「コーヒークップを」「見た」というラベリングを入れるのが適切であるうし、腕を伸ばすときやや腕をひねるのであるうから「回した」とラベルを挿むことも結構である。修行の初期では五感のセンサーションを専ら取り上げるが、小乗仏教では意思も法であって（意門）このラベリングもなされねばならない。コーヒークップの例で言えば「上げようと思った」という意思のラベリングが入る。またドアを開けようとする場合、手を伸ばしノブに手が触れたとき「冷たいと感じた」というラベルを加えたほうが良いかもしれない。

いくら動作を緩慢にしても全てのセンサーションにサティを入れるというのは相当な緊張を強いられ合宿3日目ともなれば全てを放り出して帰宅したくなる。疲れて坐禅の最中に眠くなれば「眠気、眠気」としなければならぬ。十日間の合宿の最後に、2時間サティを切らさないというテストがあるが、なかなか合格できない。

このような修行を何年続ければ覚者になれるのだろうか。スリランカの高僧に聞いた話であるが、森羅万象（或いは宇宙全体）は瞬間ごとに生、住、滅を繰り返している。映画のようにフィルム一コマ一コマは皆違っているが続けて見ると切れている部分は見えず繋がって見える。我々は五感によつて認識しているのだが、感覚器官自体が森羅万象の一部であるから生、住、滅のサイクルが同期していて滅を認識できないのだと言つても良い。しかしヴィパッサナーの修行を二十年以上も続けていると我々はこのサイクルの同期から自由になり滅を経験することができると言つのである。高僧自身は或るときドアのノブを回そうとして一瞬ノブが消えるという形でそのことを体験したと話していた。その域に達すれば自我が存在しないことが直観で分かるのだらう。

それでは誰でもそうなるかと言えばそうではなくて、何回か転生を繰り返して機が熟したときに初めてその域に達すると言つことであるらしい。

このようなヴィパッサナーの修行は在家では所詮無理なことである。修行を達成することはおろか、修行を味わうだけでもその期間中は社会生活から隔離されねばならない。タイなどの小乗仏教国で一般人でも修行のため一時僧侶になって寺に入るといふのはヴィパッサナーの性格そのものから来ているのである。一時経験のため僧になることはあつても所詮在家は在家で、僧に敬意を払い布施などによつてこれを支えるだけがその勤めであるといふのはいわば当然の帰結である。

ただ大乘仏教が小乗のアンチテーゼとして生まれたといつこともあつて、大乘を正しく理解するにはヴィパッサナー及びそれと裏腹をなす小乗仏教の理論体系を理解することは必要なことと思われる。（小乗において理論と修行の体系が整然と対応しているのは驚くばかりである。）それを踏まえずに般若心経などを解説している向きは自我流と評されても止むを得ないであらう。

私は一時ヴィパッサナーに熱中し、一週間から十日の合宿に5回位参加したと思う。小乗仏教にはアピダルマと呼ばれる存在の分析に係る壮大な体系があるが、ヴィパッサナーの修行はそれを踏まえたものである。最近十数年前につけた克明なヴィパッサナーの修行記録が出てきた。しかし理論と実践の微妙な絡み合いは自分で書いたものなのに既にいくらか読んでも理解することができなくなつていた。

そのようなヴィパッサナーと小乗仏教から私が離れることになつたのは大きな理由があつた。そのことについて何れ書いてみたい。

# 文語の苑

メールマガジン第十六号

小倉百人一首 十五 壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れより 暁ばかり憂きものはなし

この歌の解釈には、古来幾つかの争点があります。その一つが、「つれなく見え」たのは有明の月だったのか、それとも女だったのか、です。有明とは、夜が明けたのにまだ沈まずに空に有る月、つまり十六夜以降の月です。朝のその時刻を意味することもあります。有明の月は、夜が去って行ったのに月だけが残ってる（い）る、だからつれない、と昔の人は感じました。有明がつれないとは、和歌の普通の修辞です。ですからこの歌の前半は、単純に、朝方の別れ、とだけ読んでもよい。別の解釈は、有明の後の「の」を「の如く」と読みます。女はあの有明の月のようにつれなかった、だから暁が憂い。この解釈によれば別れの時は必ずしも朝でなくともよい。少々持って廻った解釈ですが、見方によれば古今集時代の歌らしい技巧であり、案外これがこの歌の作者の真意だったかも知れません。

もう一つの争点は、女と別れた時、恋の契り、これを当時の言葉で「逢ふ」と言ひ（い）ますが、その後だったのか、それとも「逢ふ」ことができなかつた、つまり下世話に言へ（え）ば、女にフラレたのか、です。この歌は、日本最初の勅撰和歌集、古今集の卷十三の初めのところに収録されてる（い）ます。卷十三は、卷十一から卷十五までの恋の歌の三巻目です。スペースの関係で詳述できませんが、巻ことの歌の収録や巻の中の配列は、実に厳密になされてる（い）る。卷十一は、相手をちらと見た恋、卷十二では恋がもっと進んで、思ひ（い）は募るけれども、まだ「逢ふ」ことはできません。「逢ふ」のは卷十三になってからです。例へ（え）ば古今集卷十三には、在原業平と契りを交は（わ）した直後の、伊勢の齋宮の歌、「君や来し吾や行きけむ思ほえず夢か現か寝てか覺めてか」があります。

所がこの壬生忠岑の歌は、卷十三の初めの部分に置かれてを（お）ります。卷十三ですから恋の成就は近い。しかしこの歌の前後にあるのは皆「逢ふ」前の歌です。さ（そ）うすると古今集の編纂者はこの歌を、「逢ふ」前の歌と見てる（い）たことになります。女を口説きに口説いたのに女が「つれなく」て「逢ふ」ことができず、空しく帰る歌です。もちろん朝方、有明の月を見ながら。恨めしく帰ると読んでもよい。

あるいは古今集に集録された場所に拘泥せず、この歌だけを読めば、全く別の解釈もできます。男の思ひ（い）は深いのに、長い間馴染んで来た女が心変わりしてしまひ（い）ます。前と打って変わった女のつれなさ。女の気紛れに男は振り回され、女が恨めしい。そんな解釈もできます。つまりこの歌の価値は、見る角度によつて色合ひ（い）や燦めきを千変万化させる宝石のように、様々な解釈のできる多義性にあると言つてよいのでせ（し）よ（う）。ある時後鳥羽上皇が新古今集の撰者の藤原定家と藤原家隆に、古今集の歌の中で最も良いと思ふ（う）歌を、打合せせずに掌に書けとお命じになりました。二人が書いたのは、二人とも期せずしてこの壬生忠岑の歌だったと伝へ（え）られます。定家はさらに、「こんな歌が一つ詠めたら、一生の思ひ（い）出になる」とまで言つて居ります。

新古今集の時代になると、この歌は、そんなにも味はひ（わ）い（深い歌と、評価されてる（い）たや（め）し（ます）。

加藤淳平

# 文語の苑

メールマガジン第十六号

限りなきめぐみを四方に

愛國百人一首を讀む(十三)

(平成二十四年十月二十九日)

限りなきめぐみを四方に敷島の大和島根は今榮ゆなり

藤原爲定

時は後醍醐天皇の御世、帝は延喜(醍醐天皇)、天曆(村上天皇)の世に返せとの御父君後宇多天皇の御遺志を御繼ぎになり、大いに政の改革、學問の奨勵を進められました。その効果も始めて、朝廷と幕府のあり方も漸く問題となるなど、新しい世への期待が高まりつゝありました。兼好法師の徒然草が出たのもこの頃です。さうした時代を背景として詠はれたこの歌には、「限りなきめぐみ」と遠く延喜、天曆の皇運に思ひを致し、その再來を「今榮ゆなり」と祝つてゐるのです。またこの結句の「今榮ゆなり」からは本連載の第六回にも引用しました

青丹よし寧樂の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり

小野老

を思ひ出させう。小野の奈良時代から爲定の鎌倉時代末期までは約五百五十年、御稜威の下に榮えてゐるのは「寧樂の京師」から「敷島の大和島根」に廣がつてゐる、「四方に」の一句はこのことを表現して不足ありません。

詠者の爲定は前回の詠者として紹介しました藤原爲定の孫に當ります。二條家の和歌の道を嗣ぎ、後醍醐天皇の敕撰、續後拾遺和歌集(第十六代集)の撰者を勤めました。但しこの歌は次の十七番目の敕撰集風雅和歌集に入つてゐます。

續後拾遺集が完成したのが嘉暦元年(一一三二六)、この五年後に元弘の變が起り、南北朝の對立が始ります。一時建武中興がありましたものの短期に失敗に了り、帝は皇子憲良親王(後村上天皇)と共に吉野で南朝の孤壘を守られることになりました。

ところで「天に二日なく、國に二君なし」と言ひます。この南北朝の對立、どちらも正統を主張するのですが、先づ南朝には北畠親房が「神皇正統記」で述べてゐるやうに保持する三種の神器があり、これが今日天皇代數に北朝を算へない理由の一つになつてゐます。

一方、北朝の方はどうかと言ふと、室町幕府の將軍は北朝の宣下を受けるといふ、謂はば「實效支配」の外に、敕撰和歌集の宣旨又は院宣があります。この時代に風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺の四集が撰せられました。これは寔に日本的な思考方法と言へます。今日でも毎年の宮中歌會始に全國からの詠進があります。これこそ現代の敕撰であり、その正統性は誰でもが實感できるのです。

爲定はその後、後光嚴院敕撰の新千載和歌集(第十八代集)の撰者にもなりましたがその心の内は如何であつたでせうか。

# 文語の苑

メールマガジン第十六号

文語歌曲「思ひいづれば」(小學唱歌集)

これも稲垣干穎が作詞した唱歌ですが、七七調で押し通した詩はメロディにそぐつてゐません。そもそも「音楽取調係」には音楽関係者はあません、江戸時代の紅燈の巷で通行してゐた邦楽などは、明治の國作りと相容れないとした方針があり、修身や國語の教師を集めたため、音楽そつち退けて言葉の意味や語法についての議論の方が盛んでした。特に俗語を排し雅語をとり入れることも重視されたのです。稲垣が「いろは歌」を唱歌にとりあげるやう提案したのに對し、文部省側が反對の立場をとり、採用されませんでした。宗教性の排除といふより、「いろは歌」は俗で、五十音圖は雅とされたためだとも言はれてゐますが、これは五十音圖普及に妨げになると考へられたことからだつたといふ解釋が當つてゐるやうです。

この論争の時期から事典や辭書が、それまでの長い間「いろは順」だつたものが、「五十音順」によるものとなつて行き、ほぼ十年後に大槻文彦の「言海」が完成してゐるのも同じ動きからだつたと言へませう。ただ筆者には、小學唱歌に「いろは歌」が入つてゐたらとの残念な思ひがあります。その場合は、外國の民謡ではない旋律が使はれたらうし、今では忘れられたに近い「いろは」が日本人の頭にしみこんだらうにと信じられるからです。

この歌も、「うつくしき」や「螢の光」と同様、スコットランド民謡によるものです。原題は、*Ye banks and braes o' bonnie Doon*、

發想が萬葉集の防人歌四三四六番にあることは間違ひありません。

父母が頭(かしら)掻き撫で幸(さき)くあれて 言ひし言葉(けとば)げ忘れかねつる 文部稻

麻呂(はせへのいなまる)

(父母が頭を撫でながら、つつがなくなすこせよと言はれた言葉が忘れかねてゐる)

一 思ひ出づれば、三年(みとせ)のむかし、わかれしその日わが父母の、  
頭なでつつ、まさきくあれと、言ひしおもわの、慕はしきかな。

\*まさきくあれ 「眞幸きく」で、幸せに、つつがなくの意。

\*おもわ 面輪、顔

二 あしたになれば、門(かど)おし開き、日數よみつつ父待ちまさん  
わが思ひ子は、ことなしはてて、はやいつしかも、歸り來なんと。

\*ことなしはてて 任務を全うして

\*はやいつしかも いつか早く

三 タべになれば、床うち拂ひ、指折りつつ、母待ちまさん、  
わが思ひ子は、事なしはてて、はやいつしかも、歸り來なんと。

四 あしたになれば、門おし開き、夕べになれば、床うち拂ひ、  
父待ちまさん、母待ちまさん、早く歸らん、もとの國べに。

# 文語の苑

メールマガジン第十六号

現代中國語の訓讀

中國語の聖書に次の箇所があります。馬可傳九章、耶穌基督の言葉です。

無論誰使門徒中任何一個微不足道的人離棄我、倒不如用大磨石拴在他的脖子上把他沈到海底去。

これを、漢文訓読風に解釋してみませう。括弧内は削除しても結構です。

誰なるを論ずる無く、門徒の中にて、任何なる一個の微かにして、道ぶに足らざるの人なりとも、これをして、我より離棄ら使めば、倒る大いなる磨石を用て脖子の上に拴ぎ、他を（把て）海底に（到り）沈み去らしむるに如かず。

進歩的な人々は「現代中國語は外國語なのだから、漢文を訓讀するやうに讀んではいけない。英語のやうに、別の言語として習得すべきだ」と言ひます。

しかし、我々は、子供のときから漢字を學んでゐるのです。初めから西歐人に比べて、中國語を學ぶための有利な條件を與へられてゐることになります。

しかも、高校では漢文を習ひ、中國語の文法の基礎を習得してしまつてゐます。

それを活用してはいけないといふのですから、イデオロギーに凝り固つた人々の教育論には恐れ入るしかありません。

ついでながら、最近の學生の英語讀解力が低下してゐるのも、さういふ偏狹な教育論の爲せる業であることは間違ひありません。

日本語の漢字の意味から類推し、漢文の知識を驅使すれば、中國語に對して、日本語の方言のやうな親近感を抱くことができるのではないでせうか。

現代中國語も漢文訓讀が出来るのです。

「無論誰」は、英語の whoever や no matter who によく似てゐます。no matter who は *no matter who*、It doesn't matter who 〃〃〃 の形から變形したものですから、「誰であるかは問題でない」といふこと。それを中國語では「誰なるを論ずる無し」と言ひのです。

「誰が私の弟子をして、私を棄てて去らせよ」とも、それは問題でない（誰であらうとも同じだ）。その誘惑者は首に石を繫いで、海底には入り込んでやるのが一番よい」とつなぐります。

「任何」は、私の見解では、「如何」の形容詞形です。「如何」が副詞であるのに對して、その形容詞形を作つてゐるのであり、英語に宛てれば any *who*。

「任何一個微不足道的人」は、「どんな微かな（重要でない）一人の言ふに足らざる人であつても」ですが、「ここでまた、「道」を「いふ」と訓讀する漢文の知識が役立ちます。

「倒」は漢文の「率」に近い働きをします。私は「むしろ」と訓讀することにしてゐます。

「不知」は漢文そのままです。「〃〃に如かず」ですが、「〃〃するのが一番よい」した方がよい」と言ひわけ。

「用」と「把」は *use*、*hold* の前置詞 *with* のやうなものです。「まつて」と訓んでもよい、置字だと思つても結構です。

# 文語の苑

メールマガジン第十六号

「**到**」も前置詞で、英語の to にです。これも置字として、「**到り**」を抜いて、「海底に沈み去らしむるに如かず」と読んでよいです。

ところで、「前置詞」といふ英語の用語を使ふと、「中国語では介詞と言ふんだ。英語の前置詞とは違ふのを理解してゐないのか」と怒る人がゐます。

さういふ人は、中国語で書かれた英語参考書を読んだことがないのに相違ありません。(そんなもの、讀まなくていいのですが)

中国語で書かれた英語参考書では、「前置詞」のことを「介詞」と言ひます。まさしく、介詞とは前置詞のことなのです。

我々は英語の前置詞のことを preposition とは言はずに(氣障な人は言ひますが)、「前置詞」と言ひます。

さうであるからには、中国語の前置詞のことも、「介詞」とは言はずに「前置詞」と言つたらよいのではないでせうか。

日本の學者たちは、一般に「正確でないといけない」といふ意識が強すぎます。

特に語學の場合には、もっと、氣樂な、いい加減な態度で立向ふ方が、結局は能率が上がるやうに思ひます。

最後に、冒頭の中国語の英語私譯を示して置きます。

No matter who may tempt one of my disciples to leave me, even were the dropout the least important one, it would be best to put a big millstone around the tempter's neck and sink him to the bottom of the sea.

高田友

# 文語の苑

メールマガジン第十六号

## 今年の夏の収穫

十九年前佛蘭西より歸國し配属せられたる職場、偶々神保町の近辺に所在したれば、小生、晝休みに古書店街を散策すること習ひ性となり、古書蒐集、我が生涯の道楽と相なれり。最近では電腦による古書の通信販売大いに普及し、以前と比し蒐集遙かに容易くなりぬれど、古書の現物をば手に取るの感触、矢張り格別の捨て難き味はひあり。

夏の風物詩の一つに百貨店の催す大古本市あり。数多の古書店一堂に會するは正に壓巻にて、古書を求むる客の真剣なる眼差しと相俟つて、暑さ忘るる無上のひと時と言はざるべからず。今夏も時間を工面し、幸ひにも大古本市に二度ほど出掛けることを得たり。

新宿京王百貨店の大古本市（七月下旬）にては、以下の三冊を購入せり。

一、大町桂月評釈「日本樂府」（至誠堂、大正元年第六版）

天金、函入り、極めて美しき状態の古書なり。頼山陽の「日本樂府」は、日本歴史の名場面六十六を漢詩にしたるものにて、「蒙古來」、「本能寺」など、詩吟にても吟詠せらるる名作揃ひなり。桂月曰く、「弘安の役は、我有史以来の一大快事也。而して能く之を歌ひ得て日本人をして快哉を叫ばしむるものは、獨り山陽の蒙古來あるのみ」と。桂月の解説、格調高く、既に蔵書となりたる桂月評釈「日本外史」（至誠堂、大正五年第四十四版）と共に終生の愛読書となること必定なり。

二、萩野由之著「日本歴史」（上下）（博文館、明治三十年訂正拾七版）

これも保存状態の甚だ良き古書なり。著者の萩野氏は東京高等師範学校教授なれば、或は講義の教科書乃至副読本なりしか。発行は、日清戦争直後、日露戦争前の時期なり。本文は「国史八天之御中主神二始マル」により始まる。今代史の最終章は「臺灣版圖二入ル」にて終はる。

三、平尾花笠著「愛國百人一首手習帖」（泰東書道院、昭和十八年）

戦時中の発行故、状態悪しと雖も、和綴じのペン習字手本は貴重なるものなり。

柿本人麻呂「皇は」より橘曙覧「春にあけて」までの百首。文語の苑メルマガに好評連載中の市川浩先生による「愛國百人一首」をば十倍楽しむ為購入したり。

東急東横店の大古本市（八月中旬）にては、以下の六冊を購入せり。

一、鷗外全集第三十五巻「日記」（岩波書店、昭和五十年）

文豪の日記は、文語を学ぶ上にて教科書と成り得るものなれば、予てより眼を皿の如くにして全集の端本を探し居りければ、遂に発見したる喜び、一人なり。「独逸日記」より、明治十七年十月十三日（鷗外伯林に着きての翌々日）の記述、「大山陸軍卿に見えぬ。脊高く面黒くして、痘痕ある人なり。聲はいと優く、殆女子の如くなりき」と。

二、日本思想体系「頼山陽」（岩波書店、昭和五十一年）

収録されたる「日本政記」は、神武天皇より後陽成天皇まで百七代の天皇の編年体による通史にて、頼山陽晩年の渾身の力作なり。「日本政記」は伊藤博文・井上馨若き日の愛読書なりき。



# 文語の苑

メールマガジン第十六号

- 三、大町桂月著「増訂 筆のしづく」(郁文舎、大正十一年)  
名文家と言はるる桂月の代表的なる随筆集なり。たとへば「樗牛の一生」は、大学時代よりの親友高山樗牛への弔ひ文。学生時代に樗牛酔ひて戯れに桂月に謂ひて曰く、「君は体が弱さうなり。必ず早く死せむ。君死なばわれ弔文を作らむ」と。
- 四、安藤英男著「考証頼山陽」(名著刊行会、昭和五十七年)  
たざわ書店より刊行されたる同著者の「頼山陽」(昭和五十四年)とほぼ同一に近き内容にて、やや落胆したるも、之れも亦古書蒐集の楽しみの一つかと思ひ直しけり。
- 五、湯澤天眞著「国民朗詠読本」(麹町酒井書店、昭和十八年)  
日本人の有名漢詩作品を一冊の文庫本に纏めたるものなり。題字は内閣総理大臣東條英機によれり。戦時下に於て国民の士気を鼓舞したらむ。
- 六、森まゆみ著「かしこ 一葉『通俗書簡文』を読む」(筑摩書房、平成八年)  
樋口一葉の書簡文は超一流との評価之有り、文語の勉強には恰好の教材とこそ言ふべけれ。既に文庫本は所有せしが、人に貸して戻らざれば、元の本も購入したる次第なり。たとへば、暑中見舞いの文より、「今日は寒暖計九十度を越し申候いかが御しのぎいらせられ候や」。

土屋博